



Title	北アメリカ先史時代ミシシッピ文化における防御施設の地域性
Author(s)	佐々木, 憲一
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 59-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105029
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

北アメリカ先史時代ミシシッピ文化における 防御施設の地域性

佐々木 憲 一

はじめに

本稿の目的は、北アメリカ先史時代、ロッキー山脈東麓以東の広大な地域で紀元 10 ～ 16 世紀に栄えたミシシッピ文化において、集落を取り囲む防御施設の様々な様相を紹介し、ミシシッピ文化の中での地域的差異に迫ろうとするものである。ミシシッピ文化とは、土器の胎土に細かく砕いた貝殻を混和材として使うこと (Holmes 1903)、防御壁を伴い、豪族居館の基壇や墳丘墓などの「マウンド」が無数に築造されたこと (Spaulding 1955)、当時の人々がトウモロコシ農耕に依存していたこと (Griffin 1967) で定義づけられる。同時に、ミシシッピ文化のなかでの地域的差異も大きく、ミドル・ミシシッピ文化、カドー文化、サウス・アパラチア文化などの地域文化に分けられている (図 1, Fagan 2005 : p.470 右図など)。本稿ではそういった差異に、防御施設という観点から迫りたい。

まず本稿で使う用語について定義する。防御施設 *fortification* とは、防御柵、防御壁、周濠、周堤を包括した用語である。防御柵と防御壁は、戦争の考古学に関する英語文献では *palisade* あるいは *stockade* と表現され、防御柵と防御壁の区別は特にしていない。本稿では、列を成すよう木柱を立てて、木柱と木柱の隙間を小枝などで充填したにせよ、隙間が残るものを防御柵とする。防御壁は、柵の表面全面に漆喰状に粘土を塗布したものとする。これらは考古学的に区別が困難な場合が多いので、区別できない場合は防御柵 (壁) と記述する。

本稿のテーマに関しては、すでに「北アメリカ大陸南東部先史時代の戦争の痕跡」(佐々木 2021) を活字化している。この前稿では「戦争」をテーマにしたために、防御施設のほか、戦争を示す証拠である殺傷人骨、武器、戦争・戦闘を物語る画像資料までも対象としたために、防御施設についての議論を尽くすことができなかった。本稿は前稿で対象とした遺跡にも言及するが、少し視点も変えた上、防御施設に関する議論をさらに深めるものである。集落構造の差異についての先行研究は存在する (例えば Smith 1978) が、防御施設の差異に焦点を当てた先行研究は、管見では見つからなかった。

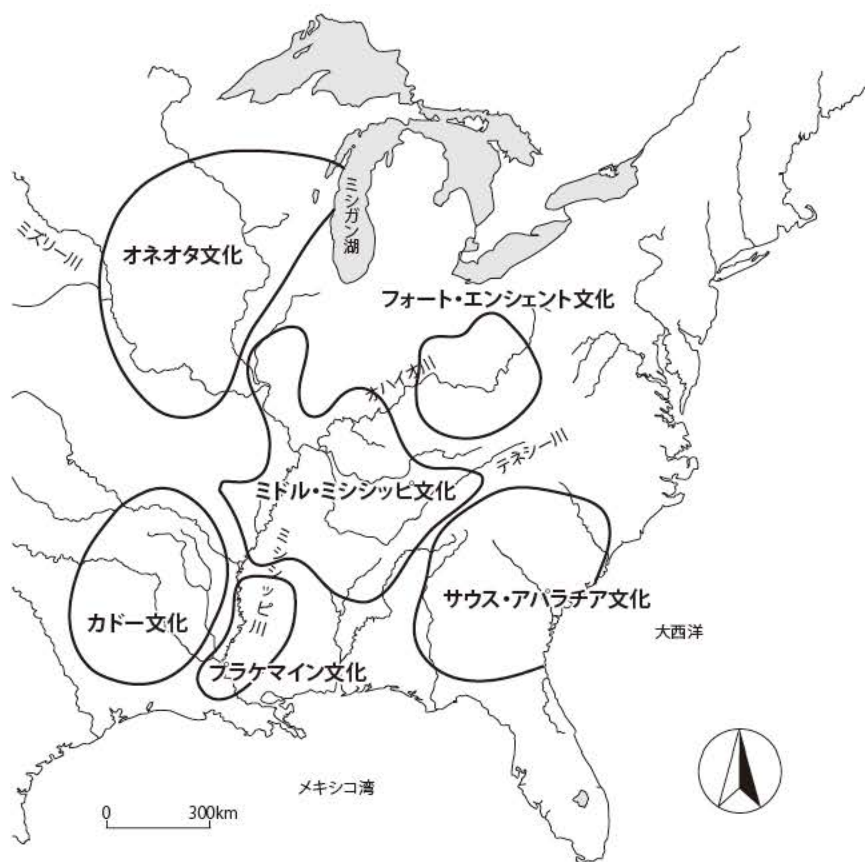


図1 ミシシッピ文化内の地域文化

1. 先行研究

ミシシッピ文化の防御施設に関する先行研究としては、マイルナー (Miler 1999) による北アメリカ大陸東部における戦争の考古学の総論と、ダイ (Dye 2009: 第9章) による単行本『北アメリカ東部先住民の協調と対立の考古学：社会進化における戦争の道、平和の道』があげられる。ダイの議論はマイルナーの総論を基本的に継承している。その上で、例えば防御柵（壁）は紀元5世紀ころに出現した弓矢の対応であるとか、近隣の集落が服従し首長制社会が安定すると防御施設は緩和された、など幾つか新しい解釈を開陳している。本稿では遺構としての防御施設を議論するので、以下マイルナー (Milner 1999) の総論から、本稿の前提となる記述を抽出しよう。

まず北アメリカ東部先史時代遺跡の防御柵（壁）は防御以上の目的があるとの考えがある（例えば Jolley 1983）が、柵（壁）で囲まれた中に入るための出入口が、人の出入りが困難になる

よう構築されている (以下、タウンクリーク・インディアン・マウンド遺跡がその実例) ため、防御が主たる目的とマイルナーは主張する。そして、防御的立地だけに基づいて集落間対立を議論するには不十分で、防御施設こそが、それで囲まれたなかで生活する人々を守ることができたと言う (p.111)。

防御柵 (壁) は発掘調査により柱穴列として認識できるが、発掘調査以前に、幾つかの遺跡では周濠、周堤として防御施設の存在を認識できる、とする。また柱穴の直径の大小を防御柵の「強さ」を推定する、不十分ながらも根拠とした (p.113)。それに基づき、ミシシッピ文化の 45 遺跡、イロコイ族の集落などアメリカ合衆国北東部の 159 遺跡を対象に、直径 15cm 以下の柱穴は比率的に北東部で大多数を占めるのに対し、直径 15 ~ 25cm の柱穴はミシシッピ文化の遺跡では比率の上で大多数を占める。また、直径 25cm 以上の柱で建てられた防御柵 (壁) を有する遺跡は北東部、ミシシッピ文化にも少数存在し、ミシシッピ文化の方が比率的にやや多いことを示す (p.118, 図 2)。

北アメリカ東部では、防御柵 (壁) が出現したのは紀元 9、10 世紀のこと、つまりミシシッ



図 2 本文中で言及する遺跡の位置

ピ文化出現直前である。防御柵（壁）は少し間隔を空けて建てられた直立する柱で構築され、その隙間は小枝か木の皮で塞がれていたという。また時に柵（壁）の表面が粘土で塗られることもあった。これは、粘土の無数の小さな塊が柱穴列付近で検出されることに基づく（p.118）。

ミシシッピ文化の防御柵（壁）は、北東部に比べて太い柱を用いて、計画的に設置された。おそらく、予め組織化された共同体労働力が構築には導入されたであろう。また稜堡（バステイオン、突出部 *bastions*）はアメリカ合衆国北東部の防御集落のそれよりも大幅に強化され、また柵（壁）から大きく突出しており、攻めてくる軍隊の側面への反撃に効果的であった。これまでに15のミシシッピ文化の遺跡で22の稜堡が発掘され、それらは30 m間隔で設置されたことが判明している。この30 mは当時の矢の短い射程距離⁽¹⁾（ダイ [Dye 2018 : p.158] によると160 mは飛ぶが武器として効果があるのは60 m）に対応したものである。主要な遺跡では、防御柵（壁）に加えて、深い周濠と高い周堤が伴うことがあった。このように、よく計画され、頑丈な防御施設は、ミシシッピ文化首長制社会における軍隊動員のポテンシャルへの対応であろうという（p.120）。

さらに、未発掘で地表の踏査や航空写真から防御集落とわかる遺跡も含めて、合計109カ所を対象に遺跡の形成時期を検討すると、ミシシッピ文化が起こって間もない、1050年頃、防御集落の数が急増し、その数は17世紀前半まであまり変わらない（p.123, 図3）。また、特に強固な防御施設を有するミシシッピ文化の集落は、近隣の集落より規模も大きく、居住期間も長い傾向にある。こういう集落の防御柵（壁）は複数回建て直された（p.125）。

以上を前提として、継承すべきところは継承し、検証すべきところは検証してゆきたい。

2. 防御柵（壁）

マイルナー（Milner 1991）の挙げた109カ所という数字が示すように、ミシシッピ文化の遺跡の多くが防御施設を伴っていたことは、20世紀前半には所与の前提となっていたようである。ミシガン湖西岸ウィスコンシン州のミルウォーキーとマディソンの中間に位置するアズタラン *Aztalan* 遺跡（現在、州立公園；図2-2；以下、言及する遺跡の位置は図2）の1933年に刊行された発掘調査報告書で、担当者が「アズタランで検出されたような、防御柵を示す柱穴の列がカホキア遺跡で検出されても、驚くことはない」（Barrett 1933 : p.60）と予測している。また、1951年に刊行された、イリノイ州南端に位置するキンケイド *Kincaid* 遺跡の報告書でも「ミシシッピ文化における多数の遺跡での防御施設が存在が、キンケイド遺跡での類似した防御施設の探索に我々を駆り立てた」（Cole 1951 : p.54）と記し、防御柵（壁）の存在を予測し、演繹的にトレンチを設定している。

本稿では、ミシシッピ文化の最大のイリノイ州カホキア遺跡、第2の規模のアラバマ州マウ

ンドヴィル Moundville 遺跡、防御柵が復元されているノース・カロライナ州タウン・クリーク・インディアン・マウンド Town Creek Indian Mound 遺跡、そして防御壁のあり方が少し異なるインディアナ州エンジェル Angel 遺跡の例を紹介し、防御柵（壁）が単にシンボリックなものではなく、軍事的な目的を有していたことも示したい。

A. カホキア遺跡（図2-1）

この遺跡についてはすでに日本語で紹介している（佐々木 2014・2019）ので、防御柵（壁）のみ紹介することにする。稜堡を伴う防御柵（壁）は遺跡最大のマックス・マウンド南方に位置するマウンド 60 の南端（Holley et al. 1990）と、マックス・マウンドの東方約 200 m の場所で発掘により検出されており、東柵（壁）の発掘されていない部分も、航空写真から看取される土色の違いに基づき、復元ができている（図 3, Anderson 1977, Iseminger et al. 1990）。

東方のトレンチでは稜堡が3カ所、南端のトレンチでは稜堡が1カ所、検出されている（図4）。東方のトレンチでは、稜堡も防御柵（壁）も3回建て直されたこと、稜堡は中心から中心で約 25 m 離れて設置されていたことがわかった。最古の稜堡は平面プラン直径約 3.5 m の半円形、2 番目に古い稜堡は平面プラン一辺約 6 m の正方形、3 番目と最新の稜堡も平面プラン正方形で、各々一辺約 5.4 m、4.1 m と小規模になっている（Iseminger et al. 1990）。

柵を構成する木柱は、幅 40 ～ 50 cm、深さ 1 ～ 1.5 m の溝のなかに建てられた（日本考古学で言う「布堀り」）。柵の部分の柱穴は

【図版はインターネット非公開】

図3 カホキア遺跡での防御柵の発掘位置（実線）と
想定された防御柵（点線）

【図版はインターネット非公開】

あまり検出できなかった（検出できた柱穴の深さが5～10cm）が、稜堡部分は柱穴が30～70cmより深く、直径も30～40cmあった。柵部分の木柱は約30cm間隔で建てられていた（Iseminger et al. 1990）。

柵や稜堡の側面は、細かい粘土の塊が一切検出できなかったにもかかわらず、イセミンガー（Iseminger 1990:p.33）は、

図4 マンクス・マウンド東方での稜堡の検出状況

表面が粘土で塗布されていたと主張する。その根拠として、同じミシシッピ文化に属する前述のアズタラン遺跡や後述するエンジェル遺跡では、防御壁が壁土で塗られていたこと、カホキア遺跡では焼き討ちにあっていないため、壁土が固まることがなかったために残らなかった可能性があること、そして防御柵築造面が表土直下で、壁土の痕跡が後世の耕作などで失われた可能性があること、をあげている。

マンクス・マウンド北方と西方の防御柵（壁）の位置については不明である。

B. マウンドヴィル遺跡（図2-5）

この遺跡についてもすでに日本語で紹介している（佐々木 2014・2019）ので、防御柵（壁）のみ紹介することにする。防御柵（壁）は1930年代の失業対策事業の一環での大規模発掘調査で確認されていたが、近年の発掘調査で稜堡も検出された（Scarry 1998）。この遺跡北西隅（図5）のECB区と名付けられた発掘調査の成果によると、まず幅30～50cmの溝を掘削、その溝の中に、20～40cmの間隔を空けて直径25～35cmの木柱を立てた。柵の表面に粘土が塗られていた痕跡はなかった。防御柵（壁）は少なくとも3回、建て直されており、西から徐々に東の方（遺跡の内側）に向かって、移動していた（図6）。

ECB区の調査では、少なくとも1回、建て直された稜堡も検出された。稜堡は柵より外側に6～7m突出しており、平面プラン長方形、幅は4mであった。建て直された稜堡は、柵の外側3面のみ柵（壁）を有していた。また稜堡内、柵から約2mのところに、稜堡の内側に向けて溝が少しはみ出しているが、ここにも木柱が立てられ、その木柱は稜堡の床か屋根を支持するものであったかと発掘担当者のスカリー（Scarry 1998 : p.79）は推定している。柵の位置は

少しずつ変わっていったが、稜堡の位置は基本的に変わっていない。

弧の防御柵（壁）のさらに内側、ECB 区の南東隅にもう一つの防御柵が検出された。この防御柵も 1 回の建て直しを経ている。前述の防御柵（壁）とは繋がらないようなので、一連の防御壁ではなく、別物とスカリー（Scarry 1998 : p.79）は位置付けている。

C. タウン・クリーク・インディアン・マウンド遺跡（図 2-6）

ノース・カロライナ州タウン・クリーク・インディアン・マウンド遺跡（図 7, Coe 1995）は前稿（佐々木 2021）で簡単に触れたが、防御柵がほぼ完全に復元されているので、ここで改めて紹介したい。遺跡は州の中部に位置し、サウス・アパラチア文化に属する。遺跡は紀元 1150 年から 1450 年まで機能していた。面積は 2 ha 強と非常に小規模で、ミシシッピ文化を象徴するマウンドは 1 基しか存在しない。

遺跡はマウンドヴィル遺跡と同様、1930 年代の失業対策事業として、大々的に発掘調査された。1955 年に州指定史跡となって以降も、発掘調査と遺跡の復元事業が継続した。余談であるが、ノース・カロライナ大学チャペル・ヒル校の学部生であったルイス・ビンフォードも、1950 年代にこの遺跡の発掘調査に参加しており、図 7 の原図はビンフォードによるものである。

遺跡の四方は防御柵で完全に囲まれて

【図版はインターネット非公開】

図 5 マウンドヴィル遺跡と ECB 区の位置

【図版はインターネット非公開】

図 6 マウンドヴィル遺跡 ECB 区で検出の稜堡と別物の防御柵

おり、北と南に「要塞化」された門があった(図8)。防御柵は、遺跡の成長拡大に合わせて4回、外へ外へと建替えられた。現在復元されている遺跡の防御柵は高さ2.7mであるが、5回建てられた防御柵のなかでは一番小規模なものという。その南北の門を「要塞化された」と先に表現したのは、門を見学すると、その出入り口部分の中心にも柱が立てられており、一度に一人しか出入りできない構造になっているからである。これは防御を相当意識したものと考えた

【図版はインターネット非公開】

い。南北の要塞化された門のほか、川に面する側に、防御壁にトンネルのように開けられた小さな門が2か所設けられていた(Coe 1995 : pp.87-8, Fig.5.3)。

D. エンジェル・マウンド遺跡
(図2-3)

エンジェル・マウンド遺跡(Black 1967)も前稿(佐々木 2021)で簡単に触れたのみであるので、ここで改めて紹介したい。遺跡はインディアナ州南西隅に位置し、オハイオ川に面している。遺跡は紀元1200年から1450年頃まで機能していた。三方を防御壁で囲まれた面積はおおよそ40ha。そのなかに11基のマウンドが立地する。

1890年に国立スミソニアン研究機構アメリカ民族学局のサイラス・トーマス(Thomas 1894 : pp.558-559)がこの遺跡を踏査し、防御壁の痕跡を「周堤」*embankment*と表現し、遺跡の地図を初めて作成した。次に、1938年以前に撮影された遺跡の航空写真の分析から、防御壁が一部存在したことが追認され、1939年以

図7 タウン・クリーク・インディアン・マウンド遺跡



図8 タウン・クリーク・インディアン・マウンド遺跡の
要塞化された門

降、マウンドヴィル遺跡と同様、失業対策事業の一環として大々的に発掘調査された。この戦前の発掘調査を担当したグレン・ブラックは戦後、インディアナ大学の教員となり、大学の実習として1945年から1954年、1957年から1962年の毎年の夏に発掘調査を続けた。ブラックの1964年の死去後も発掘調査は続いた。

1963年の発掘調査で、遺跡の複数の地点で防御壁が検出された（図9・10）。特に1963年の発掘は、前年の地下レーダー探査の結果を踏まえて、防御壁を狙い撃ちして発掘した成果である。発掘されていない部分もあるが、防御壁は全長2,225 mを測り、30.5 mごとに稜堡が設けられていた。防御壁は2回ないし3回建替え、あるいは修復されていた（Black 1967）。この遺跡の防御壁の特色は、表面に粘土が塗布されていたことである。防御柵ではなく、直截的に「防御壁」と表現する所以である。

防御柵（壁）の出現が弓矢の出現から400～500年遅れたとはいえ、弓矢への適応であるとのダイ（Dye 2009：第9章）の見解を先に引用したが、柵の表面に粘土を塗布するのは火矢に対する防御とダイ（Dye 2018）は推測する。また、主要な遺跡では、防御柵（壁）に加えて、深い周濠と高い周堤が伴うことがあったというマイルナー（Milner 1999：p.120）の見解も先に引用したが、ミシシッピ文化最大とそれに次ぐ規模を誇るカホキア遺跡、マウンドヴィル遺跡では周濠・周堤を有していないことに注意すべきである。この点については、本稿最終章で議論することとする。



図9 エンジェル遺跡での防御壁の復元
（図8の柵とは区別される）



図10 復元された防御壁の前の説明版
稜堡の検出状況の写真

3. 周濠と周堤

防御柵（壁）を有するミシシッピ文化の集落は普遍的であるが、周濠を伴う集落は数が多くない。また前稿（佐々木 2021）ではアーカンソー州トルテック・マウンド遺跡（2022 年にブラム・バイユー Plum Bayou 遺跡と正式に名称が変更された）を周堤が伴う遺跡としてあげたが、この遺跡はミシシッピ文化創成期（紀元 8 ～ 10 世紀）の集落であり、ミシシッピ文化より古いホプウェル文化（紀元前 2 世紀～紀元 5 世紀）のマウンド群が儀礼用と想定される土塁で囲まれる習俗を伝統として継承している可能性が高く、今回の防御目的の周堤を伴う例から外した。また周濠を周堤と一括して扱うのは、周濠を掘削したときの排土を周濠の内側に積み上げて、結果として周堤が形成されることが多いからである。

A. エトワ遺跡（図 2-7）

ジョージア州エトワ遺跡（Moorehead 1932, Larson 1971, 1972）も前稿（佐々木 2021）で、周濠を有する遺跡としてやや詳しく紹介した。エトワは州北西部エトワ川の河岸段丘上に位置する、堀で囲まれた 22.7ha の遺跡で、紀元 1350 年から 1650 年まで営まれた。堀（図 10）は深さ 3 m、幅 9.1 m を測り、周濠の 2 か所で、マウンド築造の土砂を確保するために掘られた土坑につながっている。堀は遺跡の三方を囲み、残りの 1 方向はエトワ川で区画されているため、防御用と思われる。発掘調査の結果、周濠は空堀であることが判明した（Larson 1972 : pp.386-387）。

また空堀のすぐ内側には防御柵（壁）が設けられた。まず幅 46cm、深さ約 30cm の溝を掘り、そこに直径 30 ～ 36cm の木柱を約 30cm 間隔で建てた。木柱の根本約 90cm が土中に刺さっていた。エトワ遺跡防御柵の木柱とほぼ同じ直径であった、1970 年代初頭のアメリカ合衆国の電話線の電柱の立て方に基づいて、木柱の地表より上の部分は地下の部分の 4 倍とすると、防御壁は高さ 3.6 m と推定できる。また一辺約 3.05 m の稜堡がこの時の発掘で検出された。ただ、稜堡が何基設けられたかは、全掘されていないため不明である（Larson 1972 : p.387）。

B. パーキン遺跡（図 2-8）

アーカンソー州パーキン遺跡（図 11 : Morse 1981）も前稿（佐々木 2021）で触れている。遺跡は州の北東部にある 6.9ha の遺跡で、紀元 1350 年から 1650 年まで機能していた。パーキン遺跡はハドソン（Hudson 1997 : 11 章）の詳細な研究により、スペイン人デ＝ソト Hernando de Soto が 1541 年に訪れたカスクイ Casqui 集落であることがほぼ確実である。デ＝ソトによると、カスクイは近隣の集団と頻繁に戦争していたという。川以外の三方は、所により深さが 1 m に達する非常に広い堀で囲まれている（図 12）。1978 年、1979 年の発掘調査を担当したモース（Morse 1981 : p.19）は、この周濠は防御目的と断じ、そして堀掘削の排土はマウンドの盛

土に使われたと推定している。

【図版はインターネット非公開】

1965年の発掘調査で、列を成す5つの柱穴が発見され（Davis 1966）、モース（Morse 1981:p.23）は防御柵（壁）の一部ではないかと想定している。これについては、フォンタナ（Fontana 2007:p.97）が疑義を呈しており、防御柵（壁）の確実な痕跡が検出されるまでは、パーキン遺跡を防御集落とみなすことについて、極めて慎重な態度を示している。この遺跡を見学した際、堀は幅が非常に広い代わりに浅く、防御としての有効性は高くないという印象を受けた。しかし、頻繁に戦争をしていたというデ=ソトの記録を重視すると、やはり防御柵や稜堡は設けられていたと想定する。

C. トウォサギ遺跡（図2-9）

ミズーリ州トウォサギ Towosahgi 遺跡（図13）は、もともとベックウィズ・フォート Beckwith Fort（ベックウィズ砦）遺跡と呼ばれ、1894年のアメリカ民族学局の報告（Thomas 1894:p.186）以来、防御集落と認識されてきた。遺跡の形成はミシシッピ文化初期に始まり、ミシシッピ文化を時間的に通して、集落として機能し続けた。現在でも6基のマウンドが残っている。

現地では周堤、周濠は現在明確に確認できないが、航空写真により古くから周堤、周濠の存在は指摘されてきた（Williams 1954:p.147, Price and Fox 1993:p.5）。想定される周堤に囲まれたエリアは9.7haと推定される（Chapman 1980:p.209）。トーマスの発掘調査以降最近に至るまで、発掘調査が何回も行われてきたおかげで、この遺跡の防御施設の詳細が明らかになっ

図11 パーキン遺跡



図12 パーキン遺跡の周濠

【図版はインターネット非公開】

ている。遺跡北方の防御柵は3回建て直された。周堤の外の周濠は幅6.1～6.7m、深さは76cmであった(Prince and Fox 1993 : pp.51-54)。遺跡南部にも周堤が存在したと想定されているが、確実ではない(Cottier and Southard 1997 : p.249)。遺跡南部の防御柵(壁)の発掘調査で稜堡が1カ所検出され、それは防御柵より外に5.2m突出していた。その稜堡は州立トウォサギ遺跡公園の地表に明示されている(図14)。このような稜堡が複数、等間隔で設けられたと想定されているが、未確認である。

D. ミズーリ州内のその他の遺跡

以上が、筆者が実地に見学した、周濠を伴うミシシッピ文化の遺跡である。そのほか、多くはないもののチャップマン(Chapman 1980: 6章)とフォンタナ(Fontana 2007: III章G節)が言及する、周濠・周堤を伴う遺跡がミズーリ州内には複数あって以下に紹介する。興味深いことに、トウォサギ遺跡も

図13 トウォサギ遺跡



図14 トウォサギ遺跡の稜堡

含めてすべて州の南東部に集中する。

a. マシューズ遺跡(図2-10)

マシューズ Matthews 遺跡も早くから防御集落と認識されてきた。19世紀末のポッター(Potter 1880 : pp.11-12, Plate C) の測量調査の時点で、周堤はおおよそ高さ92～107cm、そのすぐ外側の周濠は深さ46～61cmを測った。第2次世界大戦中に発掘調査が行われ、周堤は底部幅およそ2.1m、高さ107cm、硬質の粘土で形成されており、周堤の上に2列の防御柵が立てられて

いた（Walker and Adams 1946 : p.85）。もちろん、周堤に囲まれたエリアは 20ha に達し、その範囲内での発掘調査も行われている。マウンドのほか、2つの建造方法の異なる住居跡などが確認されている（Walker and Adams 1946 : p. 85, Williams 1954 : p. 92, Chapman 1980 : pp.198-200）。

b. サンディ・ウッズ遺跡（図 2 - 11）

サンディ・ウッズ遺跡は 19 世紀末にポッター（Potter 1880 : Plate A）が発掘調査を実施した結果、周堤はおおよそ高さ 61 ~ 107cm、幅約 2.1 m、そのすぐ外側の周濠は深さ 46 ~ 91cm、幅約 2.1 m であった。ただ、ポッター（Potter 1880:p. 9）は、この周濠が隣接する沼につながっていることから、水利目的であり、周堤は集落を洪水から守るためであった可能性を指摘した。周堤に囲まれたエリアの面積は 16ha を測る。実はフォンタナ（Fontana 2007 : III 章 G 節）が、ミシシッピ文化における戦争の考古学的証拠の節でサンディ・ウッズ遺跡に言及しておらず、このポッターの見解を重視したのかもしれない。なお、フォンタナはトウォサギ遺跡、マッシュューズ遺跡を防御集落の確実な例としてリストしている。

c. リルボーン遺跡（図 2 - 12）

チャップマン（Chapman 1980 : pp.212-214）はポッター（Potter 1880 : pp.13-14, Plate D）を引用し、リルボーン Lilbourn 遺跡も周堤・周濠を伴っているとする。しかし、ポッターは周濠の幅や深さについて記述していない。また防御施設の北東隅に稜堡が存在するか確認するためにチャップマン（Chapman 1976）自身が 1960 年代後半に発掘したが、人為的な遺構は確認できなかった。防御施設に関する情報が少ないためであろうか、フォンタナ（2007）はこの遺跡に言及していない。

d. パワーズ・フォート遺跡（図 2 - 13）

パワーズ・フォート Powers Fort 遺跡は、ミシシッピ文化のパワーズ小期 Powers Phase（紀元 1275 年から 1320 年）の名祖遺跡で、約 20ha の遺跡である。その「フォート（砦）」という名前が示すように、三方を周堤と周濠で囲まれた防御集落である。1890 年代にトーマス（Thomas 1894 : pp.195-196）が測量と一部発掘調査を行った。19 世紀末の現状で周濠は深さ 91cm から 152cm、幅 1.8 m から 3 m を測った。周濠の南東隅を発掘したところ、深さは 4.6 m あった。1965 年、1969 年の発掘調査で溝に建てられた木柱の柵列を検出しているが、溝に関する記述はない（Price and Griffin 1979, Pertulla 1998）。フォンタナ（Fontana 2007 : p.98）はこの遺跡が防御集落か、慎重な態度をとっている。

e. ノッドグラス遺跡（図 2 - 14）

パワーズ小期に栄えたノッドグラス Snodgrass 遺跡（Price and Griffin 1979）はマウンドを伴わない遺跡であるが、周濠によって囲まれており、さらに稜堡も検出されているため、本稿の対象に含めることとした。周濠の幅は地点にもよるが幅 1.2 m から 2.4 m、深さは平均して

61cmであった。西辺と南辺の周濠は繋がっておらず、ここが集落への入り口ではないかと発掘担当者は推定している。ただ、入口がどのように敵の侵入を防いだかについては不明である。発掘担当者は、周濠を掘削した排土で周堤が築かれたと推定しているが、削平されたく、遺構として検出はできなかった。東辺の周濠に接して稜堡が3基検出された。稜堡は平面プラン半円形で、集落の外側に突出しており、集落側は解放された状態（柵がない）であった。稜堡と稜堡は約23m離れており、これは矢の射程距離に対応したものと、発掘担当者は推定している（Price and Griffin 1979 : pp.37-40）。

E. ミズーリ州外の周堤・周濠を伴う遺跡

フォンタナは、防御集落と確実に言える遺跡としてテネシー州リンズレー Lindsley 遺跡（図2-15, Fontana 2007 : p.89）とアラバマ州ラバブ・クリーク Lubbub Creek 遺跡（図2-16, Fontana 2007 : p.95）の2カ所をあげる。前者は1877年の測量調査で、深さ1mの周濠に囲まれていることがわかった（Putnam 1878）。表採の土器に基づき、遺跡は紀元1100年から1400年にかけて営まれたと推定される（Phillips 1939）。後者は明確な防御柵（壁）を伴っているが、その外側の周濠は白人入植前後の掘削という（Peebles 1983 : p.401）。

4. 結 論

以上、北アメリカ先史時代ミシシッピ文化における防御施設の諸相を紹介してきた。ここで幾つか興味深い点を指摘したい。まずマイルナー（Milner 1999 : p.120）は「主要な遺跡では、防御柵（壁）に加えて、深い周濠と高い周堤が伴うことがあった」と言うが、カホキア遺跡とマウンドヴィル遺跡は周堤・周濠を伴っていない点である。次に、周堤・周濠を伴う防御集落は、場所的にサウス・アパラチア地域文化に属するエトワ遺跡を除くと、すべてミドル・ミシシッピ地域文化、ミシシッピ川中流域、ミシシッピ文化の核となる地域に限られているようである。これは、ミシシッピ文化のなかでの一つの地域的特色として区別できる可能性が出てきた。それではエトワ遺跡をどのように解釈すればいいのだろうか？エトワ遺跡研究をライフワークとしているキング（King 2019）は、エトワ遺跡とその周辺の遺跡でミシシッピ川中流域の遺物が発見されていることに基づき、ミシシッピ川中流域の人々がエトワ遺跡とその周辺に移住した可能性を指摘している。つまり、周濠を掘削する習俗もミシシッピ川中流域からエトワ遺跡に導入された可能性があるのだ。

マウンドヴィルが周濠を伴わない点については、マウンドヴィルとその周辺では、周濠を掘削する習俗が根付かなかったと言えよう。ミシシッピ文化内での社会運動の「渦巻きの中心 vortex」とポーケタット（Pauketat 1998）が表現するカホキアの場合は、マウンドヴィルと違って解釈が難しい。ひとつは、カホキアが同時期（ミシシッピ文化前期）のなかで隔絶した規模

を誇っており、周濠を必要としなかった可能性がある。デイヴィッド・ダイの教示によれば、本稿で挙げた周濠を伴う遺跡はミシシッピ文化中期に栄えた集落が中心であり、周濠を掘削するという習俗が、カホキアが廃れ始めた頃に出現したと言ってよい、とのことである。確かにエトワ遺跡やパーキン遺跡の年代、それからパワーズ小期はダイの言うとおり、ミシシッピ文化中期である。ただ、本稿で触れたように周濠を伴う遺跡の周濠部分の調査が不十分であり、年代については今後の調査に委ねられなければならない。

ミシシッピ文化における周濠については、先行研究もほとんどなく、また先史時代のマウンド遺跡の地図は 19 世紀後半のものを現在も使用しており、20 世紀以降ほとんど調査がされていない遺跡も多い。したがって、本稿で提示した「周濠から見た地域性」という問題は今後検証されなければいけない。とはいえ、ひとつ新たな仮説を提示できたと考える。

謝 辞

本稿は新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学:文明創出メカニズムの解明」(研究代表者:松本直子) A-03 班「集団の複合化と戦争」(班代表:松木武彦)の研究成果の一部である。筆者を分担者に入れてくださった松本先生、松木先生にまず感謝申し上げる。マウンド遺跡の見学と本稿準備には、メンフィス大学地球科学科教授デイヴィッド・ダイ David Dye 先生に大変お世話になった。2023 年 1 月には 5 日間、運転免許のない筆者のためにメンフィスから 400km 以上毎日車を走らせて、パーキン遺跡、トウォサギ遺跡など多くの遺跡の見学に連れて行ってくくださった。また、本稿執筆に際しては、参照すべき複数の文献をご教示くださり、一部については PDF をお送りくださった。周濠についても、アメリカ人考古学者にとっても興味深い視点であると評価してくくださった。厚く御礼申し上げます。また思い出深いカホキア遺跡の見学は 2016 年 6 月に福永先生のほか、当時在籍中の中久保辰夫さん、ライアン・ジョセフさん、さらに修了生の松木武彦さん、清家章さん、三好玄さんと一緒に行ったことを付記したい。

註

- (1) ダイ (Dye 2018, p.158) が指摘するように、ミシシッピ文化では単弓しか使われなかったのである。カリフォルニア州の先住民族は早くから強化弓・複合弓を使っており (Pope 1923)、それは合衆国南西部までは伝播した (LeBlanc 1999)。しかし、合衆国南東部までは到達することはなかった。

引用・参考文献

【日文】

- 佐々木憲一 2014「北アメリカから見た古墳時代考古学」福永伸哉(編)『21 世紀の古墳時代像』(『古墳時代の考古学』9) 同成社、東京: pp. 177-191

佐々木憲一 2019「北アメリカのマウンド」福永伸哉（編）『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』（科研報告書）大阪大学大学院文学研究科考古学研究室、大阪：pp. 127-154

佐々木憲一 2021「北アメリカ大陸南東部先史時代の戦争の痕跡」『年報人類学研究』第12号 南山大学人類学研究所、愛知：pp. 234-246

【英文】

Anderson, James 1977 A Cahokia Palisade Sequence. *Explorations into Cahokia Archaeology*, edited by Melvin Fowler, pp. 89-99. Illinois Archaeological Society Bulletin, No. 7. Urbana, Illinois.

Barrett, Samuel A. 1933 *Ancient Aztalan*. Bulletin 13, Public Museum of the City of Milwaukee, Milwaukee, Wisconsin.

Black, Glenn A. 1967 *Angel Site: An Archaeological, Historical, and Ethnological Study*. 2 Vols. Indiana Historical Society, Indianapolis

Bowne, Eric E. 2013 *Mound Sites of the Ancient South*. University of Georgia Press, Athens, Georgia.

Chapman, Carl H. 1976 Internal Settlement Designs of Two Mississippian Tradition Ceremonial Centers in Southeastern Missouri. *Cultural Change and Continuity: Essay in Honor of James Bennett Griffin*, edited by Charles E. Cleland, pp. 121-146. Academic Press, New York.

// 1980 *The Archaeology of Missouri, II*. University of Missouri Press, Columbia.

Coe, Joffre Lanning 1995 *Town Creek Indian Mound: A Native American Legacy*. University of North Carolina Press, Chapel Hill.

Cole, Fay-Cooper 1951 *Kincaid: A Prehistoric Illinois Metropolis*. University of Chicago Press, Chicago.

Cottier, John W. and Michael D. Southard 1977 An Introduction to the Archaeology of Towosahgy State Archaeological Site. *Missouri Archaeologist*, Vol. 38, pp. 230-271.

Davis, Hester A. 1966 An Introduction to Parkin Prehistory. *Arkansas Archaeologist*, Vol. 7, pp. 1-40.

Dye, David H. 2009 *War Paths, Peace Paths: An Archaeology of Cooperation and Conflict in Native Eastern North America*. Alta Mira Press, Lanham.

// 2018 Rotten Palisade Posts and Rickety Baffle Gates. *Archaeological Perspectives on Warfare on the Great Plains*, edited by Andrew J. Clark and Douglas B. Bamforth, pp. 145-176. University Press of Colorado, Boulder.

Fagan, Brian M. 2005 *Ancient North America*, 4th Edition. Thames & Hudson, London.

Fontana, Marisa D. 2007 *Of Walls and War: Fortification and Warfare in the Mississippian Southeast*. Ph.D. dissertation submitted to the Dept. of Anthropology, University of Illinois at Chicago, Chicago.

Griffin, James B. 1967 Eastern North American Archaeology: A Summary. *Science* 156 (37772), pp. 175-191.

Holley, George R., Neal H. Lopinot, Rinita A. Dalan, and William I. Woods 1990 South Palisade Investigations. *Illinois Cultural Resources Study*, No. 14. Illinois Historic Preservation Agency, Springfield, Illinois.

Holmes, William Henry 1903 Aboriginal Pottery of the Eastern United States. In *Bureau of American Ethnology, Twentieth Annual Report 1899-1899*, pp. 1-201. Smithsonian Institution, Washington, D.C.

- Hudson, Charles 1997 *Knights of Spain, Warriors of the Sun: Hernando de Soto and the South's Chiefdoms*. University of Georgia Press, Athens.
- Iseminger, William 2010 *Cahokia Mounds: America's First City*. The History Press, Cheltenham, South Carolina.
- Iseminger, William R., Timothy R. Pauketat, Brad Koldehoff, Lucretia S. Kelly, and Leonard Blake 1990 East Palisade Investigations. *Illinois Cultural Resources Study*, No. 14. Illinois Historic Preservation Agency, Springfield, Illinois.
- Jolley, Robert L. 1983 Mississippian Adaptations to the Middle Cumberland Drainage of Central Tennessee. *Midcontinental Journal of Archaeology*, Vol. 8, pp. 73-90.
- King, Adam 2019 The Cahokia Diaspora, Etowah, and South Appalachian Mississippian. *Cahokia in Context*, edited by Charles H. McNutt and Ryan M. Parish, pp. 352-365. University Press of Florida, Gainesville.
- Larson, Lewis H., Jr. 1971 Archaeological Implications of Social Stratification at the Etowah Site, Georgia. *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*, edited by James A. Brown, pp. 58-67. Society for American Archaeology Memoir, No. 25. Society for American Archaeology, Washington, D.C.
- " 1972 Functional Consideration of Warfare in the Southeast During the Mississippi Period. *American Antiquity*, Vol. 37, pp. 383-392.
- LeBlanc, Steven A. 1999 *Prehistoric Warfare in the American Southwest*. University of Utah Press, Salt Lake City.
- Milner, George R. 1999 Warfare in Prehistoric and Early Historic Eastern North America, *Journal of Archaeological Research*, Vol. 7, pp. 105-151.
- Moore, Clarence Bloomfield 1907 Moundville Revisited, *Journal of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia* 13, pp. 337-405.
- Moorehead, Warren K., Editor 1932 *Exploration of the Etowah Site in Georgia*. Yale University Press, New Haven.
- Morgan, William N. 1980 *Prehistoric Architecture in the Eastern United States*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Morse, Phyllis A. 1981 *Parkin: The 1978-1979 Archaeological Investigations of A Cross County, Arkansas Site* (Arkansas Archaeological Survey Research Series 13). Arkansas Archeological Survey, Fayetteville.
- Pauketat, Timothy R. 1998 Refiguring the Archaeology of Greater Cahokia. *Journal of Archaeological Research*, 6, pp. 45-89.
- Peebles, Christopher S. 1983 Moundville: Late Prehistoric Sociopolitical Organization in the Southeastern United States. *The Development of Political Organization in Native North America*, edited by Elizabeth Tooker, pp. 183-198. American Ethnological Society.
- Perttula, Timothy K. 1998 Powers Fort: A Middle Mississippian-Period Fortified Community in the Western Lowlands of Missouri. *Changing Perspectives on the Archaeology of the Central Mississippi River Valley*, edited by Michael J. O'Brien and Robert C. Dunnell, pp. 169-199. The University of Alabama Press,

Tuscaloosa, Alabama.

Phillips, Phillip 1939 *Introduction to the Archaeology of the Mississippi Valley*. Ph.D. Dissertation, Dept. of Anthropology, Harvard University.

Pope, Saxton T. 1923 *A Study of Bows and Arrows*. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology, Vol. 13, pp. 329-414, pls. 45-64.

Potter, W. B. 1880 Archaeological Remains in Southeastern Missouri. *Contributions to the Archaeology of Missouri*, Part 1, pp. 1-20. Salem, Massachusetts.

Price, James E. and Gregory L. Fox 1993 Recent Investigations at Towosahgy State Historic Site. *Missouri Archaeologist*, Vol. 51, pp. 1-71.

Price, James E. and James B. Griffin 1979 *The Snodgrass Site of the Powers Phase of Southeast Missouri*. Anthropological Papers, No. 66. University of Michigan Museum of Anthropology, Ann Arbor.

Putnam, Frederic W. 1878 *Archaeological Explorations in Tennessee*. Eleventh Annual Report of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology. Cambridge, Massachusetts.

Scarry, C. Margaret 1998 Domestic Life on the Northeast Riverbank at Moundville. *Archaeology of the Moundville Chiefdom*, edited by Veron James Knight and Vincas P. Steponaitis, pp. 63-101. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.

Smith, Bruce D. 1978 Variation in Mississippian Settlement Patterns. *Mississippian Settlement Patterns*, edited by Bruce D. Smith, pp. 479-503. Academic Press, New York.

Spaulding, Albert C. 1955 Prehistoric Cultural Development in the Eastern United States. In *New Interpretations of Aboriginal American Culture History*. Anthropological Society of Washington, Washington, D.C.

Thomas, Cyrus 1984 *Report on Mound Explorations of the Bureau of Ethnology*. Twelfth Annual Report of the Bureau of Ethnology. Smithsonian Institution, Washington, D.C.

Walker, Winslow M., and Robert McCormick Adams 1946 Excavations of the Matthews Site, New Madrid County, Missouri. *Transactions of the St. Louis Academy of Science*, Vol. 31, No. 4, pp. 75-120.

Williams, Stephen 1954 *An Archaeological Study of the Mississippian Culture in Southeast Missouri*. Ph.D. dissertation, submitted to Yale University, New Haven.

挿図出典

図 1 : Fagan 2005, p.470 右図を一部改変、図 2 : 筆者作成、図 3 : Holley 他 1990, Fig. 3 を一部改変、図 4 : Iseminger 他 1990, Fig. 11、図 5 : Moore 1907 を一部改変、図 6 : Scarry 1998, Fig. 4. 4; Office of Archaeological Services, University of Alabama Museums 原図、図 7 : Coe 1995, Fig. 5. 3; ビンフォード原図、図 8・9・10・12・14 : 筆者撮影、図 11 : Morse 1981, Fig. 5、図 13 : Chapman 1977, Fig. 7. 2; Missouri State Park Board 原図